

高齢者のスポーツ活動に関する事例研究

○駒津和康（北海道教育大学旭川校大学院）
鈴木文明（拓殖大学北海道短期大学）

1. はじめに

これまでの高齢者のスポーツ活動に関する研究では、高齢者のスポーツ参与の実態、スポーツへの社会化、ないしスポーツによる身体的・心理的効果などが中心に検討されている。しかしながら、そこでは、スポーツ活動を高齢者が生きてきた（生きている）地域や生活（＝労働）との関連で検討したものは少ない。

本研究の対象地域である北海道帯広市広野・八千代地区の高齢者のほとんどは、高齢期以前にスポーツ経験を持たないにもかかわらず、スポーツをする「場」（幌尻高原パークゴルフ場）を自らつくり、スポーツ（パークゴルフ）を継続的に楽しんでいる。そこで本研究では、同地区の高齢者によるスポーツ活動に関する事例を取り上げ、高齢者の生活（＝労働）に視点を置き、その活動の実態を明らかにする。

2. 研究の方法と調査地の概要

広野・八千代地区は、帯広市の中でも北西の端、日高山脈のふもとにある。同地区は、広野市街、南広野、北広野、八千代、上八千代、中八千代、北八千代、開進、拓成の9町内会から成っており、拓成地区は昭和20年代の戦後入植地、他の8地区は明治終わりごろから大正のはじめにかけての入植地である。また同地区には156世帯730人が住んでおり、その大部分が畑作と酪農を中心とする農業に従事している。

調査は、幌尻高原パークゴルフ場造成に携わった地域住民7名（1名を除き就農者もしくは、元就農者）に対し面接法によって行われた。調査期間は平成9年8月12日～8月14日である。

3. 結果と考察

1) 労働経験と幌尻高原パークゴルフ場造成

他のパークゴルフが盛んに行われている地域と著しく異なる点は、高齢者が自らの手でパークゴルフ場を造成したことである。加えて、このパークゴルフ場は、行政によって河川敷等に設置された他のパークゴルフ場と比較して、芝の管理が抜群に良いとの評価を得ている。以下に、その造成の経緯について述べる。

平成2年、広野・八千代地区の老人会で「パークゴルフをしよう」という声上がり、同地区へのパークゴルフ場設置を市に要望することになった。しかし、当時帯広市では同様の要望が多数寄せられていたため、市側の策定したパークゴルフ場整備計画では、同地区への設置は早くても平成8年度以降になるとの回答であった。

「早くても5年以上先、いつできるかもわからない市の設置を待つくらいなら、自分たちでつくってしまおう」、これが元就農者である彼らの出した結論である。他のパークゴルフ場を見ていた彼らは、最初から「こんな程度なら、自分たちに無理なくできる」との見通しを持っていた。その自信の裏付けとなったのは、荒れ地を開墾し、畑を作り、牧草を育ててきた労働経験である。まず、老人会の有志3人（元就農者）が私費を投じて3ホ

ール試作した。そしてその後、老人会を中心とするパークゴルフ場建設委員会が設けられ、平成4年、地域住民からの寄附金を基に18ホールの本格的なコースが完成。平成8年には、国際パークゴルフ協会の公認コースにするため、更に18ホールを増設した。

(2) 労働経験とパークゴルフ

広野、八千代地区の高齢者のほとんどが開拓者、もしくはその2代目であり、今日のように機械化がすすんでいない開拓当時の彼らにとっては、自らの手で土地を切り開き、畑を耕すこと(=労働)が生活のすべてであった。

パークゴルフ場造成の際に高齢者たちは、「仕事にいくようにいそいそと出掛けて」いき、造成に携わることが「楽しくてしょうがなかった」。こうして「自分たちの土地」につくったパークゴルフ場は、「自分たちの畑の様なもの」だと感じている。彼らは、「自分たちの畑」の維持に際しても、「雑草を見るととらずにいられない」ため、雑草を摘むための小道具を常に携帯してラウンドしている。また、彼らは他のパークゴルフ場をラウンドするとき、「まるで他人の畑を見ているよう」な気持ちになり「芝の状態が気になる」と言う。

「楽をしてはいけない」、「働くことがすべて」といった生活を送っていた彼らは、「(造成中は)こんなにパークゴルフにはまるとは思っていなかった」し、今でも「こんなに楽しくて良いのだろうか」と感じている。その反面、パークゴルフ場の芝の上を歩いているときは「畑のなかを歩いているようで落ちつく」という。

彼らにとってパークゴルフは、自分たちの畑で遊んでいるようなものであり、パークゴルフ場の維持・管理および”パークゴルフをする”ことは、高齢期以前の生活への回帰、継続であると捉えることができる。

3. まとめ

高齢社会といわれるようになった今日、「老人」が生活(=労働)の中で重要な役割を担ってきた農村においても、技術革新の波におされ、老人は労働の現場から疎外されてきている。また、疎外されずにその生活(=労働)を継続している老人に対する社会の評価の大半は、「年寄りなのによく頑張るね」といったものである。しかし、多くの経験を培ってきた彼らの生活(=労働)は彼らだから継続できるものであり、彼らだからなし得ることが現代社会においても数多くあるのではないだろうか。

スポーツにおいても、高齢者自身が自らの生活経験(労働経験)を生かせるような取り組みを行うことで、広野・八千代地区の人々のように、スポーツ経験のない人でもスポーツに親しみ、スポーツを通して「生きがい」を感じることができるのではないだろうか。また、自らの生活(=労働)から感じられる「生きがい」は、自らの生活(=労働)を肯定するものであり、自らの生活全体に彩りを添えるものになると考えられる。

今後は、広野・八千代地区の地域性に視点を置き、更に研究を深めたいと思う。